

令和 8 年度

岡山学芸館清秀中学校

A 日程入試

国 語

(45 分)

【注意事項】

1. 問題は 1 ページから 14 ページまであります。
2. 受験番号、および解答はすべて別紙の解答用紙に記入しなさい。
3. 問題用紙に解答を書き込んでも採点されません。
4. 「開始」の合図があるまで問題用紙は開いてはいけません。
5. 「終了」の合図で筆記用具を置き、監督の先生の指示に従いなさい。

1

次の——線部の漢字をひらがなに、またカタカナを漢字に直しなさい。

A 仁愛の心を大切にする。

B 欲望が満たされる。

C 目上の人の意見を見無視するとは言語道断だ。

D よく肥えた馬。

E 初日の出を拝む。

F バイオリンをエンソウする。

G 方位ジシンを使う。

H 完成した絵を見てジガジサンする。

I 飼い犬に水をアびせる。

J 山のイタダキを目指す。

2

次の□に当てはまる漢字一字を例にならって考え、記しなさい。

例 岡 ↓ □ ↓ 脈
答…「山」

登 → □ → 場

A

寒 ↓ □ ↓ 音
電 → □ → 長

D

復 ↓ □ ↓ 値
足 → □ → 気

B

愛 ↓ □ ↓ 庫
口 → □ → 窓

E

立 ↓ □ ↓ 痛
自 → □ → 筋

C

民 ↓ □ ↓ 屋
合 → □ → 題

3 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 人工的な世界は、偶然起きることをできる限り取り除いてできるものです。テレビはリモコンの「1」のボタンを押せばチャンネル1になります。「どのチャンネルになるか、押してみるまでわからない」ということはあり得ません。まっすぐに整備された道は突然曲がりくねってしまうことはなく、とても走りやすい。どこに行っても同じような値段で同じようなサービスが受けられるチェーン店の店舗では予想外のことが起きて戸惑う可能性はありません。A 文明化とは、偶然で動くものを減らしていくことなのだと思います。この世界では、必然の内容を覚えてさえすればラクで便利です、社会が時代とともに文明化していくのは、ある程度は避けられないでしょう。ただ、そうなることで、人間が本来持っている「どんなことが起きても考えて、工夫して、上手に対応していく」という能力が身につけにくくなっていくことが問題なのです。

2 いくら世界が文明化しても、すべての偶然をなくすることができない、これは当然です。天気を操ったり、すべての災害を未然に防いだりすることが完全にできるようになるとは思えません。しかも必然的な世界が増えれば増えるほど、そのシステムがうまくいかなくなったり、ときに対応できる能力が必要になります。これは「偶然の世界に対応する力」とも言えるものです。社会に出たときは、この力の有無が大切になります。なぜなら社会には必ずこうなる、という正解の世界などほとんどないからです。夫婦関係にも子どもの不機嫌にも、学校にも会社にも、正解や必然はありません。私たちは、その都度考えて応じているわけです。そしてそれは、成長したら急にできるようになるものではないので、子どものうちから偶然に対応する練習を積み重ねておかねばなりません。自然の中で目一杯遊ぶ体験をした子どもは、そのような能力が備わっていくのです。

3 認知能力と非認知能力という観点から考えてみると、認知能力は必然の世界を上手にコントロールする力であり、非認知能力は今言ったように偶然の世界を上手にやりくりする力だと言えます。学生の間は大人がおおむね安全を確保してくれた「学校」という世界にいますが、社会に出て働くようになると、日々思いがけないことの連続です。そんな場面で偶然の出来事にあわてず、うまく切り盛りできれば、いい仕事ができる人として信頼を集めていくはずですが、つまりB 非認知能力をのばすためにも、自然の中で多くの偶然と出会いながら遊ぶ体験がとても役立つわけです。

4 しかし自然体験が子どもの育ちに必要なのはイメージできても、実際に自然の中でどのような体験をさせればいいのかと考え込んでしまう人も多いでしょう。私は「このような体験をさせないといけない」と大人が無理をしてお膳立てをする必要はないと考えています。家の近くに自然がないのなら、自然を感じられる場所まで連れて行くのは大人の仕事ですが、到着したそのあとは「自由に遊ばせる」でいいと思います。それが近所の公園であっても、険しい森の中であっても、海辺であっても、自然には変わりありません。そこで起こる偶然に対して、試行錯誤しながらやりとりし、例えば上手に遊びを展開していく。それが非認知能力をのばすことにつながります。

5 X 最近の子どもは「どこでどんな遊びをしてもいいよ」と声をかけても、何をしたいかわからずじっとしていることがあります。それはやはり赤ちゃんのうちから自然の中に身を置いて、偶然に起きることの中で自分なりに興味を惹かれるものを見つけて遊ぶ、そういう体が育っていないからだと思います。子どもの能力が劣っているというわけではないのです。

6 大きな要因は子どもが遊べる環境が減っているから、さらにはメディア化や文明化によって暮らしが変わってきたからですが、人間は本来偶然に満ちた環境で創意工夫する力をずっと養ってきたということが救いです。そういうことが可能な環境があれば、再び遺伝子がはたらいで自然の中で遊ぶことはある程度できるようになるでしょう。

Y 人類20万年の歴史のうち、19万9000年以上そうしてきたのですから。特に幼い子どもであれば、自然に囲まれてしばらく遊んでいれば、そのうち感覚を取り戻していくはずです。それまでは、親が遊びの見本を見せてもいいでしょうし、子どもに自然での遊び方を伝えてくれるような楽しい自然教室に参加してもいいかもしれません。やがて「何をしてもいいよ！」と言われたときに、「やったー！」と喜ぶ子どもになっていくでしょう。

7 当たり前ですが、自然は人類が誕生するはるか前から存在しています。それぞれに自然の摂理や共存の形を模索して、今のような状態になっているのです。例えば、昔ながらの里山にはちよつとした森があつて、そこには川が流れている。その川の水を利用した田んぼがあり、田んぼを耕す農家の家が周囲に点々としている。山にはタヌキやキツネが住んでいて共生していて、人間は木を使いたくなると山に入つて必要な分だけ切ってくる。その意味で人と自然が持ちつ持たれつで共生しているスタイルがありました。それは、ピュシス（ありのままの自然）とロゴス（人々の理性や論理）のちようど中間としてつくられた「知恵の世界」でもあつたかもしれません。

8 ところが人間が文明化していく流れで、勝手に里山を切り開いて住宅地を作ると自然が模索してつくってきた共生の摂理が崩れてしまっています。木がなくなると、木をすみかとしていた生き物の居場所がなくなり、例えばイノシシの餌場がなくなつて集落に降りてくる、タヌキやキツネが住めなくなつて人が住む集落を荒らすようになるなど生態系が変わります。さらに地中に張っていた木の根がなくなること地盤が弱くなつて土砂崩れが起き、それまであり得なかつた災害が多発するのです。

9 以前の日本人は、「これをやつたら自然の摂理が崩れて大変なことになる」というのを肌で知っていて、次の世代に伝えてきました。というより何回も失敗し、自然から生命をかけて学んできたのです。それが時代とともに里山で農業をやる人が減つて、都会で会社勤めをする人が増えたため、自然の摂理を知る人がなくなつていき、世代を超えて伝えてきた知識が消えてきたのです。

10 どれだけ文明が発展して生活が便利になつていったとしても人間が自然の一部であることは変わりません。人間が自然のすべてをコントロールすることはできないというのは、自分たちが住む地球における基本情報であり、最も基本的な知識として覚えておくべきです。子どものうちから自然の中に身を置くことによって、自然には人間が覆せないルールや摂理があるのを体で学んでおくことが、将来自分の身を守ることに、さらには周囲の人や地球全体を守ることにもつながります。それは、時に「自然は怖い」という感覚となつて体に刻まれます。「けれど、面白い！」これが私たちの自然観なのです。

（汐見稔幸「子どもの生きる力をのばす5つの体験 答えのない子育てで本当に大事なこと」による）

（注）「摂理」……あらゆるものを支配する法則。

問1 本文中にある X・Y に当てはまる言葉を次のの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① なぜなら ② または ③ では ④ すなわち ⑤ ただ ⑥ および

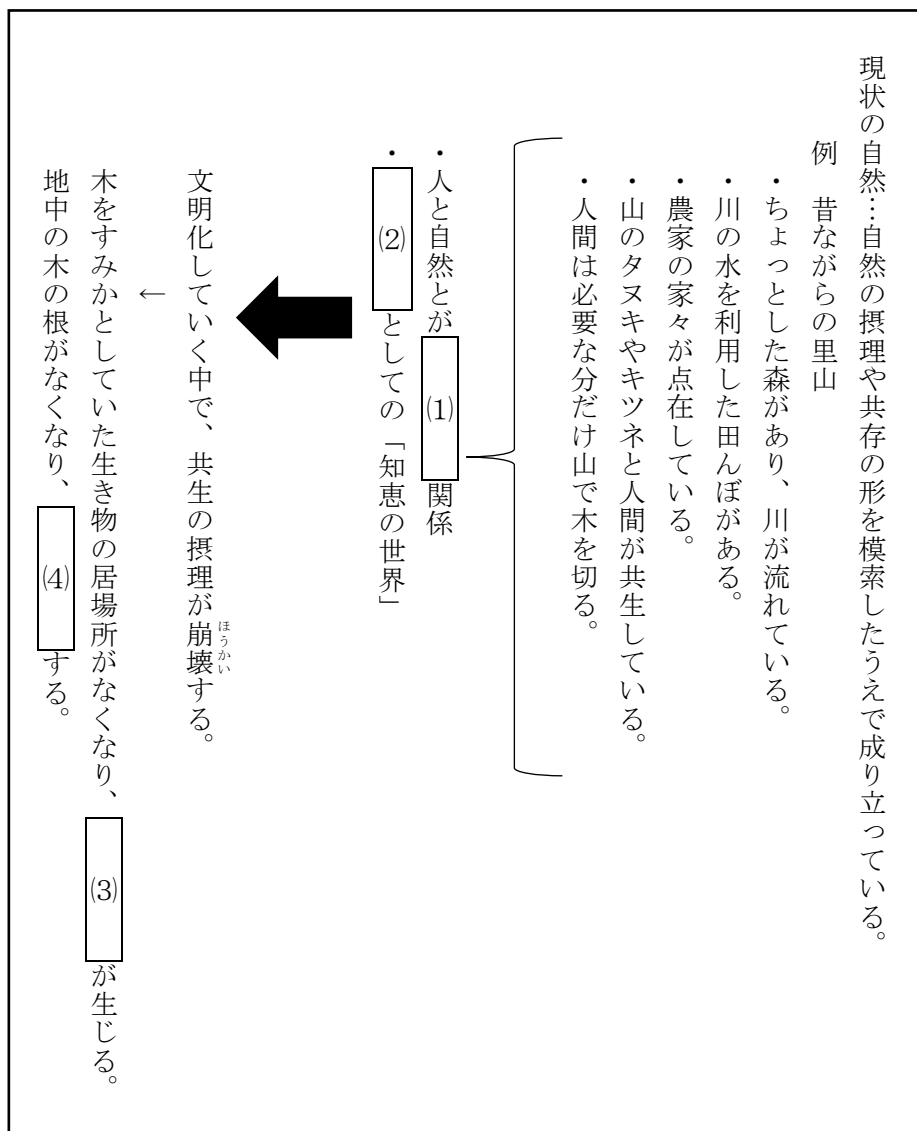
問2 ———線部A「文明化」とありますが、「文明化」という言葉を用いた次の文のうち、内容が適切でないものを選び、記号で答えなさい。

- ① どの店舗でも均一なサービスを受けられるチェーン店の出現は、文明化の一例であるといえる。
② 時代の移り変わりにともなうて社会が文明化していくことは、ある程度避けられないことである。
③ 文明化により、あらゆることに創意工夫して対応する能力を、簡単に身につけられるようになる。
④ 文明化とは、たとえば、未舗装の道がまっすぐ整備され、突然曲がりくねる可能性がなくなることである。

問3 ———線部B「非認知能力をのばす」とありますが、筆者はなぜ非認知能力を備えることを重要視するのですか。それについて説明した次の記述の i に当てはまる言葉を本文中から一六字で抜き出して埋め、ii・iii に当てはまる言葉をそれぞれ本文中の言葉を使って、一〇字以上、一五字以内で埋め、説明を完成させなさい。(句読点は一字とします。)

非認知能力とは、創意工夫などで i 一六字 であり、子どものときに ii を体験して備えておくと、将来正解も必然もない社会において、日々連続で思いがけないことに直面しても、うまく切り盛りし、他の人からの iii はずだから。

問 4 ⑦・⑧ 段落について次のようにまとめました。 (1) (4) に当てはまる言葉として適切なものを後から一つずつ選び、記号で答えなさい。



- | | | | | | | | |
|---|----------|---|------------------------------------|---|-----------------------------------|---|-----------------|
| ① | 生態系の変化 | ② | 土壌が肥沃化
<small>どじょう ひよくか</small> | ③ | 対立した | ④ | ピュシスとロゴスの中間 |
| ⑤ | たがいに助け合う | ⑥ | 自然と集落の分離
<small>ぶんり</small> | ⑦ | かつてない災害が頻発
<small>ひんぱつ</small> | ⑧ | ピュシスとロゴスから独立した場 |

問5 本文の内容として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ① 近年自由に遊ぶことが難しい子どもがいるのは、遊べる環境や暮らしの変化によって、子どもの能力がかつてと比べ劣ってきたからである。
- ② かつての日本人は、自らの生命に危機がおよぼほどの失敗経験をくり返すことで自然の摂理を学び、それを次世代の人間に伝えてきた。
- ③ 時代の変化とともに農業にたずさわる人が減り、都会で働く人が増えたことで、人間は自然から完全に隔絶かくぜつされた存在となってしまった。
- ④ 大人が子どもに自然体験をお膳立てするのはよくないので、親が遊びの見本を示したり自然教室に連れて行ったりするのは避けるべきである。
- ⑤ 自然を完全に支配することは不可能であると、子どものうちに学ぶことは、周囲の人や地球全体を守るという観点からも重要である。

4

次は、いとう みく『蒼天のほし』の一節である。保育士の千温は夜間保育園で働いている。千温の勤務中に、息子の浩介が職場を訪ねてきた。浩介は、職員の斗羽風汰の指導のもと、一日保育体験をすることになった。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小さな子どもに自然に関われる子はめったにいない。保育実習生であ

っても、どこか ^aぎこちなさやわざとらしさを感じる子がほとんどだ。そんなとき千温はできるだけほうっておくことにしている。とはいえ、さすがにわが子となると気になる。そもそも浩介は保育士になりたいわけでも、子どもが好きなわけでもなく、ただ成り行き上ここにいるだけなのだ。

ノコちゃんのおむつを替えながら、ちらちら様子を見てみると、^(注1) 芹香ちゃんと明日奈ちゃんが浩介に近づいて行った。

「プリンのおにいちゃん」

芹香ちゃんが背伸びをしながら言うと、浩介は少し気まずそうに笑った。

「おにいちゃん、ちはるせんせいのこどもなんだよ」と、芹香ちゃんは得意そうに^(注2) 萌ちゃんに教えている。

「おにいちゃん、なんさい？」

「十一歳だよ」と浩介が答えると、「せりかは五さい」と右手を広げて、

「このこは四さい」と萌ちゃんの年も紹介している。

「せりかねえ、なまえかけるんだよ」

「おれも書ける！」とジャージとポロシャツに着替えを済ませた斗羽が割り込んでいった。

「ふうたせんせーはおとななんだから、あたりまえだもん」

芹香ちゃんが^b 膨れると、浩介はあわてたように「五歳で名前が書けるなんてすごいね」と言った。そんな浩介を芹香ちゃんは嬉しそうに見上げて、「これあげる」と、ポケットから少ししおれたクローバーを取り

出した。

四つ葉、ではなくただの三つ葉のクローバー。

浩介はクローバーをまじまじと見つめて、「ありがとう」と、胸のポケットに入れた。

「じゃあ、かるたで勝負すつか」

斗羽は棚から犬棒かるたを取り出した。わかりやすい絵が描いてあるので字の読めない子どもでも十分あそべる。

かるたあそびは毎年一月に盛り上がり、春ごろになると自然と棚の奥へと追いやられていく。真夏のいまも人気があるのは、斗羽がときどきこうして取り出しているからだ。

お布団部屋と呼ばれている奥の和室に行つて、斗羽が畳の上にかかるたを^(注1) 広げていると、「いーれーてー」と翔真君と明日奈ちゃんが駆けて行った。

「あーたんも、やってみようか」

千温は^(注2) 拓土君を抱いたまま、一時保育のあーたんに声をかけて三人で輪に加わる。そのあとに^(注3) 井浦もノコちゃんといっしょにやってきた。「おー、全員集合じゃん」と斗羽は読み札を持った。

「せりか、おにいちゃんとチームになる」

芹香ちゃんは浩介の隣に座った。すっかり浩介のことを気に入ったようだ。

「空君、ノコちゃんといっしょのチームになる」と、井浦は空君に声をかけた。

ということで、プレイヤーは萌ちゃん、明日奈ちゃん、翔真君、そし

て芹香ちゃんと浩介チーム、空君とノコちゃんと井浦チーム、拓士君とあーさんと千温チームの六組だ。

「じゃあいきまーす」

斗羽が言うと、四、五歳の子どもたちはぐいっと身を乗り出した。

「いぬもあるけばぼうにあたる……はい！」

A どくしゅ 読手である斗羽がばちん！ とかるたを叩いた。

「ふうたせんせーずるーい」

明日奈ちゃんが文句を言うと、斗羽は取り札を見せつけて、「ずるくありませーん」と、舌を出した。

「ずるずる！ よんでるひとはさきにわかるもん」

芹香ちゃんが膝立ちになる。

「それはたしかにそうよね」

「えー、千温せんせーもそんなこと言うんすかあ」

二十二歳の保育士が幼児相手にムキになるかね、と千温は半笑いした。でもこういうところが斗羽風汰という保育士の面白いところでもある。大人が子どもの目線になるというのは案外難しいのだ。

「おれ読みましょうか」

浩介がぼそりと言った。

「えー、おにいちちゃんはせりかとチームう」

芹香ちゃんにしがみつかれた浩介は助けを求めるように千温を見たけれど、千温は気づかないふりをした。

「じゃあ、えつと、チームだけど、とるのは芹香ちゃんにするっていうのは？」

うーん、と唇を尖らせながらも、「いいよ」と芹香ちゃんはうなずいた。

「んじゃあ、これ」と読み札を浩介に渡して、斗羽はこぶし五つ分ほど

うしろに下がると「いいよ」と促した。

「るりもはりもてらせばひかる」

「くっそー、よし今度は負けないからな」

札を手に悔しがっている斗羽に、「本気でやってたんですか」と浩介が言うと、斗羽はきっぱりと「あたりまえじゃん！」と答えた。

「ゲームもあそびも、手を抜いたら面白くないじゃん。見てみ、あの喜びよう」

斗羽の視線の先で芹香ちゃんが飛び跳ねている。

「こつちが大人だからって手を抜くとしらせるっしょ。そりゃあハンデはいるけど」

「あ、それでうしろに下がってたんですか」

「実力差がありすぎてもつまんないかんね」

なるほど、と浩介は素直にうなずいている。

「風汰先生、支度お願いね」

千温が壁掛け時計に視線を送ると、十七時四十分を過ぎていた。斗羽は「やべっ」とかるた札を浩介に渡した。

「夕食の支度するから、片付けよろしく」

浩介はB戸惑ったように、渡された札を持ったまま斗羽の背中を目で追って、小さく息をついた。とりあえず手の中にある札と床の上に重ねてある読み札を箱に入れ、浩介は芹香ちゃんと萌ちゃんに目をやった。二人が残りの札を持っていることはわかってるが、なんと行って回収すればいいかわからないのだろう。

余計なことなど考えず、「片付けるから貸して」と言えばいいのだが、幼い子に馴染みがないと、どの程度のことを言っても大丈夫なのか、理解してもらえるのか、不安なのだ。

もしも、片付けるから返してほしいと言って泣き出されでもしたら：

…などと考えているのだろう。

浩介が立ち尽くしていると、「おにいちちゃん、おかたづけ」と芹香ちゃんが声をかけた。

「あ、うん。お片付けするんだよね」

「そうだよ。ごはんのまえば、でもあらうんだよ」

そう言って、「かして」と浩介からかるた箱を受け取り、「もえちゃんきてー」と、萌ちゃんの持っていた札も箱にしまうと、本棚の隣にある棚に置いた。

「この子たちすごいでしょ」

千温が声をかけると、浩介は素直にうなずいた。

「おれよりちゃんとしてる」

千温はくすりと笑った。

「C保育園って〇歳から六歳までいろんな年齢ねんれいの子がいつしよに生活しているでしょ。だから、大きい子は、自分はお兄さんだとか、お姉さんだっていう気持ち自然に芽生えるし、小さい子は、お姉さんやお兄さんのまねをして、いろいろできることが増えていくの」

「……きょうだい、みたいなの？」

「そこまですとは言わないけど」

千温は浩介をちらと見た。

「立場が人を作るって言うけど、保育園ではいろいろな立場を経験できるの。その経験はこの子たちが育っていくなかで、ひとつの強みにはなると思うな」

斗羽が調理室から配膳トレイはいぜんに皿をのせて運んできた。今日のメニューは冷やし中華ちゅうがとチキンスープだ。

「手伝ってくるから、浩介は子どもたちと手を洗ってらっしゃい」

「手洗い場はどこに？」

千温はふっと笑った。

「みんな喜んで教えてくれるから聞いてみて」

振り返ると、芹香ちゃんと空君が期待に満ちた顔で立っていた。

「えっと、手を洗うところって」

「せりかおしえてあげる」

「そらもー」

二人に手を引かれながら、浩介は廊下ろうかに出て行った。

(中略)

夕食の片付け、風呂ふろ、歯磨はみがきをすませて、眠ねむたくなった子はお布団部屋に行つてごろごろし始める。二十一時を過ぎて部屋の明かりを落とし、間接照明に切り替えていくと全員布団に入る。

「浩介君もこっち来て」と斗羽に言われて、浩介は空君と明日奈ちゃんの布団のあいだに座った。

「眠ねかったら、浩介君も寝ちやつていいよ」

「眠ねたくないです」と浩介は真面目な顔をして、「あの子は寝ないんですか？」と保育室で園長に絵本を読んでもらっている、あーたんに目をやった。

「ああ、うん。あーたんは一時保育で九時半のお迎えむかだから」

「イチジ保育？」

「えっと一時的って言えばわかりやすいかな。いま寝てる子たちは、毎日登園してくるんだけど、あーたんは今日一日だけ預かってるわけ」

斗羽の説明に浩介はへーつとうなずいた。

「そういうのもあるんですね」

「あるよ。そんなに多くないけどさ、家族が入院して親が付き添そわないといけないとか」

「そっか、子どもを連れて行けないとこつてありますよね」

「そうそう。ほかに美容院に行きたいとか、少し息抜きしたいって親もいるよ」

えっ、と目を見開く浩介を見て斗羽はにやりとした。

「いま、そんなことで子どもを預けるの？ とか思ったっしょ」

D 気まずそうに浩介はうなずいた。

「だよ、おれも最初はそう思ったし。でもさ、ワンオペでずっと育児するって想像するよりきついと思うんだ。そりゃあ三人も四人も一人でも子どもを育てたっていう人もいると思うよ。でもそれができる人と、苦しくなる人っているんじゃないかな。ほら、大食いの人っているじゃん。三キロのラーメン食っちゃいます、みたいな。そういう人もいれば一人前のラーメンも完食厳しいうって人もいるっしょ。あれと同じだと思うわけ。同じ人間でも頑張れるラインみたいなものってみんな違うんだなって思ったら、なんか納得できたんだよね」

なるほどね、と千温はノコちゃんを寝かしつけながら二人の会話を聞いていた。

「大食い……」

浩介がつぶやくと、そうそう、と斗羽がうなずいた。「ふうたせんせい、おしやべりうるさーい」と、芹香ちゃんにびしやりと言われて、「ごめんごめん。しー、ね」と、斗羽は舌をのぞかせた。

斗羽に促されて、浩介が空君と明日奈ちゃんにとんとんしはじめると、空君はことんと眠ってしまった。一方の明日奈ちゃんは両手の指を絡めてカエルからの形を作ったり、隣の萌ちゃんの布団に転がったりと、まだまだ眠りそうもない。

「目をつぶったほうがいいよ」

おそろおそろ浩介が声をかけると、「ねむくないもん！」と明日奈ちゃんは足をばたばたさせた。浩介は助けを求めるように斗羽に視線を送っ

たけれど、肝心かんじんの指導役はこくりこくりと居眠りをして、寝かしつけているはずの翔真君に「ねえねえ」と揺ゆすられている。

「代わろうか」

千温が声をかけると、浩介はほっとした顔を見せて、いそいそと立ち上がった。千温が座ると、明日奈ちゃんはおももぞと起き上がって抱きつくようにして千温のひざの上に座った。背中に手を当ててからだを揺すっていると、ずっと明日奈ちゃんのからだの力が抜けていった。

二十一時半過ぎ、あーたんのお母さんが迎えに来た。チャイムの音で一歳児のノコちゃんが目を覚まして、「ママ、ママ」と起き上がった。「ノコちゃんのママはまだお仕事だからね」と千温はもう一度寝かしつけた。眠りの深さも子どもによって違う。眠ったままお母さんに抱かかえられて帰り、朝、目を覚ますと家の布団の中という子もいれば、いままで眠っていたはずなのに、お母さんの足音で目を覚ます子や、お迎えの時間になると自然と目を覚ます子もいる。

どの子もお母さんやお父さんのお迎えを待っている。

「向こうへ行こうか」

浩介に声をかけると、あくびをしながら斗羽もあとからついてきた。「浩介君を送っていくんすよね。おれ、子どもたち見てるんで、もしあれだったらいいすよ。ね、園長」

「そうね、わたしもいるし、慌あわてないでいいから」

壁掛け時計をちらと見た。もう二十二時近い。

「すみません。十一時半までには戻もどれると思うので、よろしくお願いします」

「ところで、保育体験はどうだった？」

園長が言う、浩介はわずかに首を傾かしげた。

「思ってたのとちよつと……けっこう違っていました」

「だよー、わかるわかる。おれも中学んとき職場体験で保育園に行っただけど、そんなとき思ったもん。マジでミスったって」

そう言って鼻をこする斗羽に、「そういうんじゃないくて」と浩介は否定しながら、ん？ と眉を寄せた。

「ミスったって思ったのに、保育士になったんですか？」

意外そうに言う浩介に、斗羽はへへと笑った。

「そろそろ行こう」と千温が声をかけると、浩介はうなずいて園長と斗羽に会釈をした。

「また来いよ、浩介君はおれの弟子第一号だからさ」

「だれが弟子なのよ」と、千温は笑いながら、行ってきましたと二人に頭を下げた。

問1 ——— 線部 a ～ c の本文中での意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 「ぎこちなさ」

- ① 不慣れで動きがなめらかでないさま
- ② こわがりながら動くさま
- ③ えんりよがちでおとなしいさま
- ④ 慎重にふるまうさま

b 「膨れる」

- ① 興味がなさそうにする
- ② 悲しそうにする
- ③ ふきげんな表情をする
- ④ まじめな表情をする

c 「いそいそと」

- ① 落ち着いて、手早くすませて
- ② きんちょうしながら、ゆっくり動いて
- ③ いい加減な気持ちで、雑にあつかって
- ④ うれしい気持ちで、進んで行動して

(注1) ノコちゃん、芹香ちゃん、明日奈ちゃん、萌ちゃん、翔真君、

あーたん、拓土君、空君……千温の働く夜間保育園に通う保

育園児。

(注2) プリンのおにいちゃん……芹香は以前、浩介が外食中にプリン

を食べているところを見た。

(注3) 井浦……千温の同僚。

(注4) ワンオペ……「ワンオペレーション」の略で、一人で作業をこ

なすこと。ここでは親が一人で育児をすることを指す。

問2 ———線部A「読手である斗羽がばちん！ とかるたを叩いた」とありますが、千温はどのようにふるまう斗羽のことをどのように思っていますか。五五字以上、六五字以内で説明しなさい。（句読点は一字とします。）

問3 ———線部B「戸惑ったように」とありますが、千温は、なぜ浩介が戸惑った様子を見せたと考えていますか。それについて説明した次の記述の

・

 に当てはまる言葉を本文中から抜き出して埋め、説明を完成させなさい。なお、空欄内の数字は字数を表しています。（句読点は一字とします。）

浩介は

 ため、芹香ちゃんと萌ちゃんが札を持っていると認識にんしきしつつも、

 を判断できずにいるから。

問4 ———線部C「保育園」とありますが、千温は保育園の意義はどのような点であると考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ① 異年齢の子どもたちがいっしょに過ごすことで、きょうだいと変わらない強いきずなでたがいが結ばれる点。
- ② 大きい子は年長者としての自覚が自然と芽生え、小さい子は年長者がいることで、年齢相応にあまえられる点。
- ③ 自分より大きい子どもや小さい子ども、保育士など、いろいろな立場の人と関わることを通し、子どもが自分の強みに気づける点。
- ④ 〇歳から六歳までの子どもが共同生活を営んでおり、子どもたち一人ひとりが様々な立場を経験しながら育っていきける点。

問5 ———線部D「気まずそうに浩介はうなずいた」とありますが、浩介が気まずそうだったのはなぜですか。六五字以上、七〇字以内で説明しなさい。（句読点は一字とします。）

問6 本文の内容として適切なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ① 手洗いの場所を質問する浩介に対し、千温は園児に聞くよう助言したが、芹香ちゃんや空君のような幼い子に頼ることを申し訳なく思った浩介は、二人に話しかけることができなかった。
- ② 帰りに保育体験の感想を園長から求められた浩介は、自分が予想していた内容とはけっこう違っており、体験しなければよかったと後悔している、正直な気持ちを述べた。
- ③ 斗羽は、複数人の子どもを一人で育てられる人もいれば、一人で育児をすることを苦痛に感じる人もいるというように頑張れる基準は人によつて異なるものだと考えている。
- ④ 浩介は、芹香ちゃんから少ししおれた三つ葉のクローバーを差し出されたとき、それが四つ葉ではなくただの三つ葉であることについては言及せず、お礼を言つて受け取った。
- ⑤ 斗羽は、子どもとゲームやあそびをする際、自分が大人だからという理由で手を抜くと場がしらけると考えており、いつも子どもと同じ条件で全力で取り組むことを心掛けている。

